

大阪市立大学生活科学部紀要・第45巻（1997）

養護施設における養育環境と人間関係の成熟度に関する研究

森田喜治・山縣文治

A Study on Difference of Human Relationship between Chidren in Group Home or Collective Living

YOSHIHARU MORITA, FUMIHARU YAMAGATA

1. 本稿の目的

本研究は、平成8年度厚生行政科学研究「要保護児童の自立援助に関する研究」（主任研究者：柏女霊峰）の一環として実施したものである。

要養護児童の自立援助に対する関心が、制度的にも実践的にも高まっている。養護施設に入所している子どもたちは、いずれ施設を退所し、それぞれの生活を歩んでいくことになる。施設内での生活がいかに安定していても、施設退所後の生活が円滑に営まれなければ、施設ケアの評価を高めることはできない。

施設ケアの質は、子どもたち自身の育ってきた背景と現在の姿という子ども個人歴史的現実、職員によるケアの中身や入所児同士の相互交流などケアの実際的な中身、建物・生活形態・地域環境などケアの外的環境などにより規定される。

従来の要養護児童の研究は、これらの規定要因に関する独立した研究が多く、これらの関係を科学的に分析するものは必ずしも多くなかった。本研究は、生活形態の違いと子どもの育ちの違いとの関係に着目し、両者の関係を明らかにしようとするものである。

ところで、調査開始時点での養護施設数（平成7年8月1日現在）は529施設、入所定員33,158名、措置児童数25,539名である。この中で、全国養護施設協議会の名簿によると、24施設で27のグループホームが運営されている。次の表は、本調査研究に協力してくれた子どもたちの生活形態別の分布である。

表 調査対象施設数および調査対象児童数

生活形態	施設数	調査対象児童数
大舎制	9	232
混合制	10	78
グループホーム制	14	108
全 体	33	418

子どもの心理的、社会的発達特性は、バウムテスト、クレペリン検査、PCRT（家族関係調査）の3種類の検査法を用いて調査した。このうちバウムテスト、クレペリン検査による調査結果、およびその考察については、大阪市立大学児童・家族相談所紀要第14号（1997）にまとめ、すでに報告したところである。

今回は、残るPCRTの結果を用い、それぞれの居住形態において、子どもが保母に対してどのような感覚をもっているかを調査し、考察するものである。

2. バウムテスト・クレペリン検査の結果の特徴

本研究の主題に入る前に、本研究の結果を補足するために、改めてバウムテストおよびクレペリン検査結果を整理しておく。本研究の考察は、これらの結果を踏まえ、施設内での大人（保母）との関係に焦点を絞り考察するものである。

1) バウムテストの結果

バウムテストの結果は、描画に見られる特徴をバウムテスト整理表（国吉政一、林勝造、一谷彊）より抽出し、それぞれの形態で差のみられるものについての解釈仮説をその群の特徴とした。その結果、以下のような特徴が明らかとなった。

【大舎制群】抑圧的、権力に対する指向、現実的

大人数の子どもとの生活の中で、大人の目は、行き届きにくく、子ども同士の関係の中で権力に対する指向性を成長させているものと思われる。また、権力をえられなかった者は抑圧的にならざるをえない。子ども中心の現実的な社会が具現されており、その中でパーソナリティを成長させているといえる。

【混合制群】図式的、防衛的、拒否的

いくつかの生活形態の場を行き来することによって、子どもの生活環境が頻繁に変化し、いわば安定した環境を子ども自身みつけだすことができない。そのため、防衛的、拒否的にならざるをえない特徴をもつ。また、その中で、自己を安定させておくためには、まわりの変化にほんろうさせられないよう防衛的にならざるをえない状況にあり、図式的に表現することでとりあえず無難にまとめあげようという傾向にある。つまり、本来の自己の表現に対して臆病になっている可能性がある。

【グループホーム制群】繊細、神経質、退行的、自我肥大的

グループホーム制の場合、大舎制と違い、少人数の中で、大人の目を気にしての生活となり、特徴的なパーソナリティ形成に至る。つまり養育者の目を気にして敏感であり、退行的である。その意味では大人を中心とした集団を形成することになり、大人の目を気にして、神経質、繊細になり、また退行的になって、大人の目を自分に集中させようとする特徴をもつ。養育者によって肯定的にうけとられたい欲求は、自我肥大傾向として、あらわれることにもなりうる。

バウムテストの結果からは、それぞれの生活形態に違い、生活の中心がどこにおかれているかによって、そのパーソナリティ形成に一定の特徴を有していることが理解できる。ただし、バウムテストの結果からどの生活形態が良いとするかは判断できないが、基本的な特徴としてとらえることができる。

2) クレペリン検査の結果

クレペリン検査は、作業能力検査であるが、一定の性格特性もみいだすことができる。検査の結果を、高定型群、定型群、準定型群、非定型群、重度非定型群に分類し、分析した。

その結果、生活形態の違いによる差は認められず、全体的に同じような類型になっていた。すなわち、大きく定型群、非定型群との2つに分類した場合に、いずれも非定型群が5割を越え、生活形態に関わらず、不安定な状況にあることがわかる。また、この割合は少年鑑別所入所児童の結果と単相関係数からも高い確率で相関関係があることも認められた。

クレペリン検査の結果からは、施設入所児全体が、生活形態に関わらず、不安定な状況にあることがわかる。しかしながら、パーソナリティ形成上ではそれぞれの生活形態によって特徴的なパターンがみられる。すなわち、環境の変化が子どもの生活に深刻な影を落とす可能性のあることが理解できる。たとえば、混合制では様々な形

態の生活環境に移動することで、養育者が頻繁に変化することに問題があると考えられる。また、大舎制は大舎制なりに、グループホーム制はグループホーム制なりに適応し、それそのものが子どものパーソナリティとして、根づいていくが、生活環境の頻繁な変化は子どもがパーソナリティ形成を行う際のモデル、同一視対象が混乱させられることになってしまう。

3. PCRT検査結果

1) 調査の概要

生活形態が異なれば、構成メンバーの人数も異なる。一般には、少人数での生活空間が子どもに対して、より望ましいケアを実現すると考えられ、ケア単位の小規模化が提唱されてきた。その結果が、グループホームの普及であるし、建物構造は大規模型でもケア単位は小規模化するなどの試みである。

しかしながら、前述のように、バウムテストやクレペリン検査では、各形態について、顕著な優位性を認めることはできず、それぞれの形態でのパーソナリティ特性がみいだされたにすぎない。もちろん、それぞれのパーソナリティ特性から生活形態の優位性を導き出すことは不可能ではないかも知れないが、今回の分析結果からはやや危険を伴う。

本調査では、子どもの保母への意識の向け方を調査することで、保母や親と子どもとの関わり方を明らかにし、生活形態別に、大人との人間関係にどういった特徴がみられるかを検討した。

調査は、子ども自身にチェックさせる方式で、普段の生活の中で、保母にどのように注意されたり、褒められたりしているかを尋ねている。それによって、保母の子どもに対する関わり方および子どもの受け止め方を明らかにするものである。

調査結果は、生活形態により、全体をグループホーム制、大舎制（中舎制を含む）、混合制（グループホームに入る以前に大舎制あるいは中舎制のホームでの生活経験を有するもの）の3群に分け、差の検定および因子分析法により分析した。

2) 差の検定の結果

調査結果の検定については、それぞれの点数の母集団の正規性は検証されておらず、またt検定を行うにはデータ数が少なすぎるため、差の検定であるウェルチ検定を採用した。

差は、3つの生活形態個々について、学齢に応じて、

低学年、高学年および中学生のに3つに分類し、男女別に検定した。また、結果の分析は、単純に点数の高低だけでなく、プロフィールにあわせて肯定的であるかないかを判断し、各群の特徴を検討した。

①低学年の結果（表1 表2 図1 図2）

表1 PCRT 低学年女子 **P<0.01 *P<0.05

	混合	大舎制	GII制	混一大	混一G	G一大
受容, 友人	12.000	12.500	12.875			
学習	11.571	12.250	13.125			
生活	11.429	11.375	12.875			
指導, 友人	12.286	12.250	13.125			
学習	12.857	12.250	11.750			
生活	13.143	13.250	13.375			

表2 PCRT 低学年男子 **P<0.01 *P<0.05

	混合	大舎制	GII制	混一大	混一G	G一大
受容, 友人	11.778	9.600	12.625			*
学習	11.000	12.800	11.875			
生活	10.667	8.800	11.250			
指導, 友人	12.222	13.000	13.125			
学習	12.111	12.800	12.500			
生活	12.556	11.200	13.375			

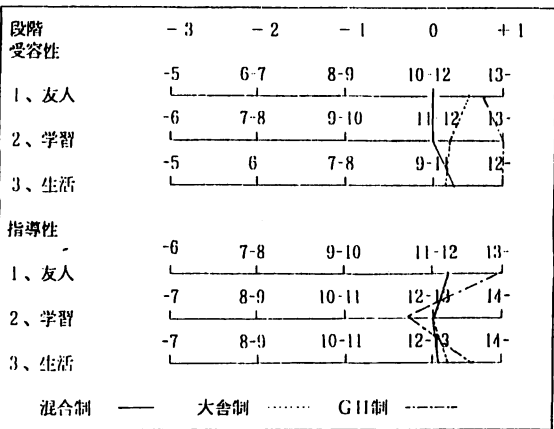


図1 低学年女子PCRT プロフィール

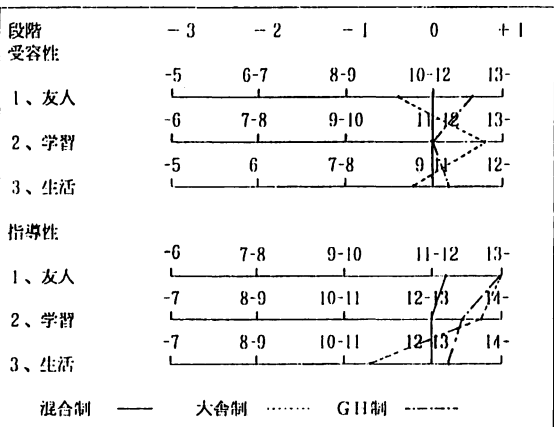


図2 低学年男子PCRT プロフィール

低学年においては、わずかではあるが、男子の大舎制とグループホーム制の間に有意な差がみられたが、全体としては、生活形態の違いによって、PCRT得点に大きな差は認められない。平均点はほぼ普通の領域であり、保母あるいは親との関わりのなかで、特に問題があるとはいえない。

唯一有意な差のみられた男子の結果は、受容・友人の項目については大舎制で生活する子どもがグループホーム制で生活する子どもに比べて点数が低くなっている。標準スケールに合わせると、大舎制の子どもは、友人を承認しようとする態度が弱いと感じている。

また、有意な差は認められなかったが、女子では指導性・友人において、グループホーム制の子どもが、やや問題ありの方向に、男子では受容性・友人、受容性・生活、指導性・生活において、大舎制がやや問題ありの方向に傾いている。すなわち、グループホーム制の女子では、学習に関して指導性が希薄であり、当然注意すべきことや、教示すべきことができていないということがいえる。また男子については大舎制で友人、生活について承認の態度が弱く、生活について放任的であるということがいえる。

②高学年の結果（表3 表4 図3 図4）

表3 PCRT 高学年女子 **P<0.01 *P<0.05

	混合	大舎制	GII制	混一大	混一G	G一大
受容, 学習	2.235	2.633	2.000			
友人	1.588	2.388	0.947	**		**
性格	3.471	3.694	2.789			*
生活	3.588	4.204	2.895			**
指導, 学習	2.235	3.367	2.263	**		*
友人	3.235	3.143	1.842		*	**
性格	2.118	2.449	1.474			*
生活	2.176	1.959	1.474			
民主, 学習	3.235	4.041	2.947	*		**
友人	2.118	3.061	2.526	**		
性格	2.765	3.367	2.474			*
生活	4.353	5.082	4.156			

表4 PCRT 高学年男子 **P<0.01 *P<0.05

	混合	大舎制	GII制	混一大	混一G	G一大
受容, 学習	1.222	2.514	2.200	**		
友人	1.000	2.459	2.500	*		
性格	2.375	3.973	3.400	*		
生活	2.333	3.946	4.000	**		
指導, 学習	2.111	3.189	3.500			
友人	2.222	3.189	5.200		*	*
性格	1.333	2.459	3.500			
生活	1.333	1.810	3.300			
民主, 学習	3.111	3.838	3.400			
友人	3.000	2.811	3.000			
性格	3.222	3.811	4.100			
生活	4.333	4.973	4.800			

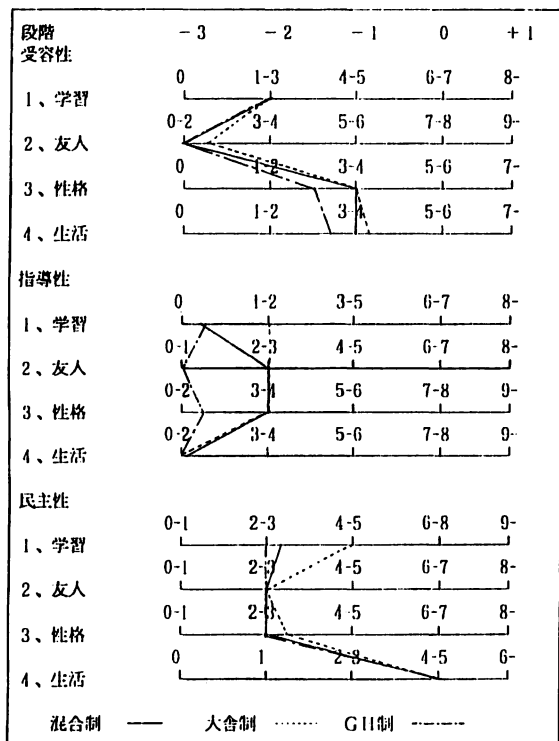


図3 高学年女子PCRT プロフィール

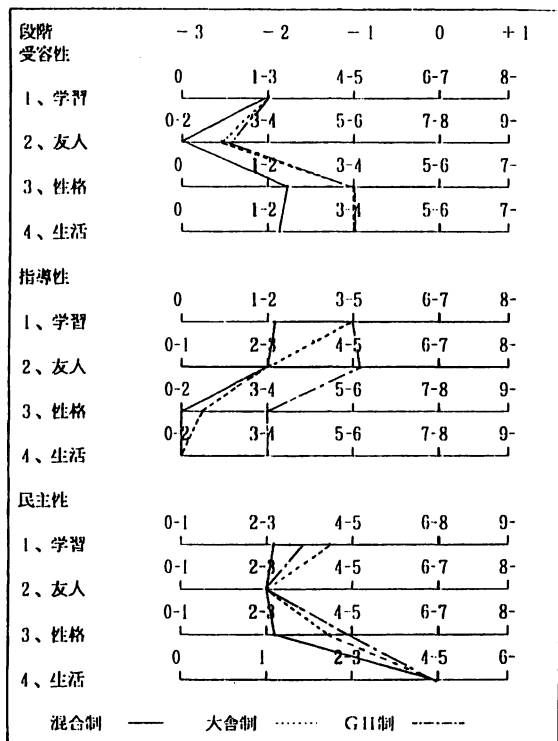


図4 高学年男子PCRT プロフィール

混合制と大舎制の女子を比較すると、受容・友人、指導・学習、民主・学習、民主・友人において、いずれも大舎制が高い。混合制とグループホーム制では、指導・友人において混合制がやや高いものの、大きな差ではな

い。大舎制とグループホーム制では、受容・友人、受容・性格、受容・生活、指導・学習、指導・友人、指導・性格、民主・学習、民主・生活、いずれの項目においても、大舎制が高い。

以上の結果、大舎制で生活しているものは、受容・友人、民主・学習の項目が、他のグループに比べて有意に高いことがわかる。すなわち、大舎制での生活では、友人を承認しようとする態度が他の生活形態に比べると顕著であるということである。しかしながら、点数自体はプロフィールから普通域に達しているわけではなく、問題のある状態にある。また、グループホーム制では、指導・友人が他に比べて有意に低い。

大舎制はグループホーム制と比較した場合、学習については指導的で民主的、友人については受容的で指導的、性格については受容的で指導的、生活については受容的で民主的であると感じている傾向はみられるが、プロフィールからみると普通域に達しているわけではない。

一方、男子では、混合制と大舎制とを比較した場合、受容・学習、受容・友人、受容・性格、受容・生活のすべての項目で、混合制が有意に低く、承認的でない。混合制とグループホーム制では、指導・友人についてグループホーム制が有意に高く指導的である。大舎制とグループホーム制では、指導・友人について、グループホーム制が有意に高い。

小学校高学年の場合、混合制では、受容・友人、受容・生活の項目が、他のグループに比べて有意に低く、友人および生活について、拒否的であるといえる。グループホーム制では、指導・友人が他グループに比べると有意に高く、友人について指導的である。しかし、全体的に点数は低く、標準スケールに合わせると、全体が問題のある方向に傾いている。とりわけ、混合制およびグループホーム制で生活する女子では、受容・友人の項目に問題があるものが多く、この生活形態では、友人の承認について問題がある。

また、グループホーム制では指導・性格、大舎制およびグループホーム制では指導・生活の項目に問題があるものが多い。グループホーム制で生活するものには、性格において放任的であるものが多く、大舎制およびグループホーム制で生活するものには、生活の面において放任的であるものが多い。

民主の項目については、いずれも比較的点数が高く、また、ほぼ普通域に属しており、生活については、自主性を重んじている傾向にあることがうかがえる。受容性については、混合制より大舎制で生活しているものの方が全般的に高く、友人関係では、グループホーム制が指

導的と感じている傾向にある。

男子については、混合制で指導・性格の項目が、混合制および大舎制で指導・生活の項目が問題のあるものが多く、生活において放任的になっている傾向がある。民主・生活の項目については、女子と同じようにほぼ普通の状況にある。

高学年では、全体的に大舎制の方が肯定的である。ただし、きわめて問題ありとなった友人の受容については拒否的となっている。大舎制の生活は多人数となり、多くの項目で、結果的に点数が高くなっているものと考えられる。

小学校の高学年ともなってくると、低学年に比べ、社会性が成長しはじめ大人の言うことよりも、仲間同士の関わりに中心がおかれるようになる可能性があり、いずれも生活のなかでの自主性については、肯定的である。つまり、子どもが自立的に動くことに関しては、大人の目は肯定的になりつつあり、また、子ども自身も、自立に関する受け入れについては肯定的と感じているようである。

それに反して、特に男子の場合、生活の指導については否定的であり、大人の指導について、否定的感情を向けていることが想像される。これらの結果から、まだ、子ども性をもっているとはいえ、大人の指示的な関わりに対して否定的であり、自主的な動きを求める姿がみえてくる。

③中学生の結果（表5 表6 図5 図6）

女子では、全体的に大きな差は認められないが、受容・生活のみが、グループホーム制が他グループに比べて有意に低い。男子では、受容・友人の項目が、グループホーム制が大舎制に比べると有意に低く、指導・生活については、混合制が他グループに比べて有意に低い。男女を比較すると、混合制およびグループホーム制では差は

表5 PCRT 中学生女子 ** P<0.01 * P<0.05

	混合	大舎制	G H制	混一大	混-G	G一大
受容, 学習	3.571	3.913	2.762			
友人	2.714	2.848	1.905			
性格	4.5	4.8	4.095			
生活	4.679	3.587	2.905	*	*	
指導, 学習	4.179	4.5	3.571			
友人	4.607	4.283	4.857			
性格	3.214	3.283	2.952			
生活	3.25	2.913	3.381			
民主, 学習	3.321	3.133	1.524			
友人	3.321	2.891	2.19			
性格	3.25	2.63	2.143			
生活	4.036	3.478	3.714			

表6 PCRT 中学生男子 ** P<0.01 * P<0.05

	混合	大舎制	G H制	混一大	混-G	G一大
受容, 学習	2.941	4.192	3.129			
友人	2.823	3.561	2.419			**
性格	4.059	4.849	3.935			
生活	3.941	4.164	4.161			
指導, 学習	3.059	4.493	3.516			
友人	3.765	4.507	3.806	*	*	
性格	1.647	3.397	3.000			
生活	2.118	2.932	2.613			
民主, 学習	2.706	3.027	3.194			
友人	3.765	3.753	3.097			
性格	2.765	3.411	3.225			
生活	4.471	4.658	4.581			

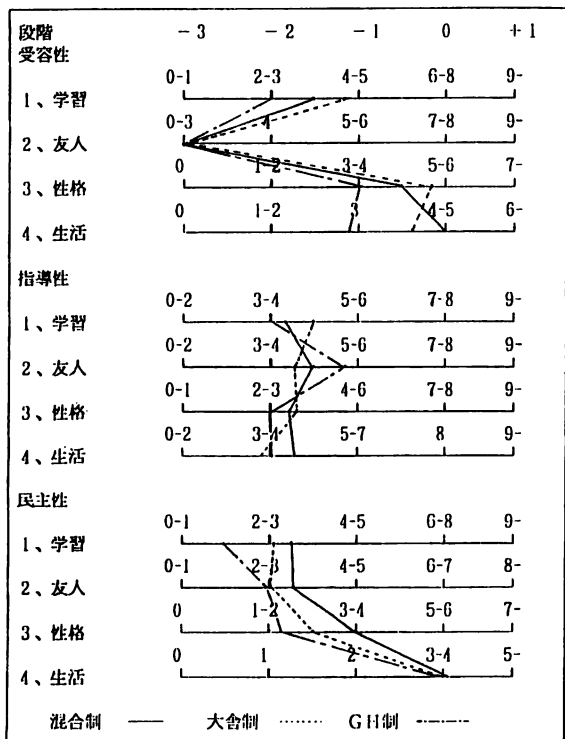


図5 中学生女子PCRT プロフィール

認められず、大舎制の男子の場合に、民主・友人、民主・性格、民主・生活が有意に高い。

平均点は比較的高くなっているが、標準スケールに合わせるといずれも、普通の状況までいかず、やや問題のある段階にとどまっている。とりわけ、きわめて問題ありとなる項目は、グループホーム制の女子の受容・友人であり、友人についての承認は、これ以外の生活形態でもかなり弱い。

中学生でしかも女子であるということから、友人について、大人が神経質になっているものと思われる。さらに、グループホーム制の子どもにおいて否定的であるということは、大人の目が届きすぎるところからくる、口やかましさと関連があるのではないかと推察される。すなわ

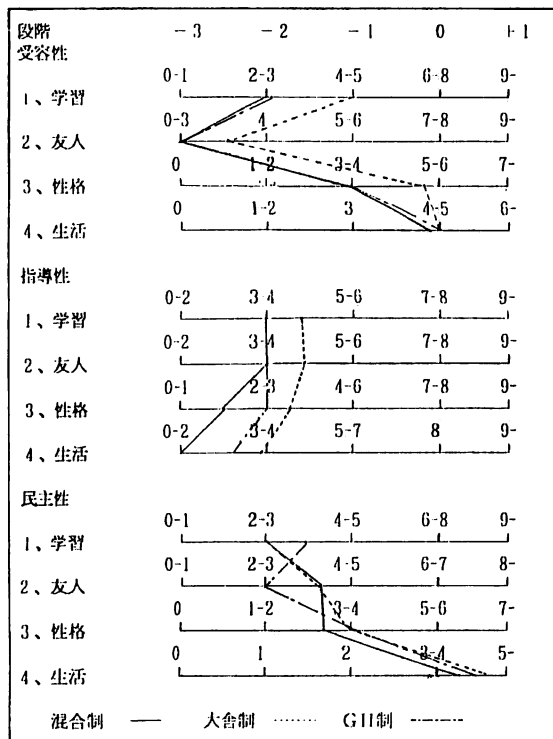


図6 中学生男子PCRT プロフィール

ち、子どもに対して否定的であることからくる状況ではなく、むしろ養育する大人の期待が高いため起こってくる状況であろう。

性別でみると、民主・生活はいずれも高く、高学年と同様、子ども達が自立的に動いていくことに関して、肯定的であるために、自立との関わりが多分にあるものと考えられる。男女で差がみられたのは、大舎制の場合で、友人、性格、学習において、いずれも男子の方が女子に比べて民主的となっている。

④考察

学年および性別による平均点の差の分析結果からは、低学年は別として、高学年、中学生については、いずれの項目についても、普通域に達しているものがほとんどおらず、いずれも、問題のある方向に傾いている。したがって、学年では、生活形態による特徴的な差は必ずしも顕著でない。すなわち、少人数であることが即、子どもの成長に良いとはいえず、子どもの発達の状況によっては、大人の干渉を嫌うこともあり、むしろ自分に対する関心の薄いことを歓迎する状況もあるといつてよい。

3) 因子分析による分析結果

PCRT検査の結果をもう少し構造的に検討するため、データを、学年別に、セントロイド抽出、バリマックス

回転によって因子分析し、さらに生活形態別の総合的特性を検討した。

①低学年の結果

混合制群(表7)では、第1因子に受容・学習、受容・生活、受容・友人、第2因子に受容・友人、指導・学習が寄与していることがわかった。そこで、第1因子を受容の因子、第2因子を社会性の因子と命名した。

混合制の生活では、子どもたちがいかに承認されるかに重点がおかれている。平均点は普通域にあり問題はあまりない。また、学習および友人では、プライベートな生活に重点をおくのではなく、他者との関係を重視しており、その承認、指導に注意が向いているものと考えられる。

大舎制群(表8)では、第1因子に指導・生活、受容・生活、受容・友人、第2因子に指導・学習、受容・学習、受容・生活が寄与していることがわかった。そこで、第1因子を生活の因子、第2因子を学習の因子と命名した。

大舎制の生活では、子どもの生活に重点がおかれており、女子では普通域をこえているが、男子についてはやや問題ありとなっている。男子は、放任的で、拒否的な方向に傾いている。次に重点がおかれているのが学習であり、男子は承認的、指導的である。

グループホーム制群(表9)では第1因子に受容・生

表7 PCRT 因子負荷量 混合制 低学年

変数名	第1因子	第2因子		
受容・学習	0.827741	-0.05325	+++	
受容・生活	0.785857	0.03893	+++	
受容・友人	0.513745	-0.53112	+	+
指導・学習	0.186755	0.522974		+
指導・生活	0.4982	0.44688		
指導・友人	0.061952	-0.27358		

表8 PCRT 因子負荷量 大舎制 低学年

変数名	第1因子	第2因子		
指導・生活	0.802725	-0.0457	+++	
受容・生活	0.734517	-0.54066	+++	+
受容・友人	0.73037	-0.08217	+++	
指導・学習	-0.32994	0.789496		+++
受容・学習	0.221137	-0.65606		++
指導・友人	0.017126	0.105889		

表9 PCRT 因子負荷量 GH制 低学年

変数名	第1因子	第2因子		
受容・生活	0.74941	0.319155	+++	
指導・生活	0.739259	-0.20232	+++	
指導・友人	0.707997	0.184162	+++	
受容・学習	-0.00096	0.569828		+
受容・友人	0.217076	0.567786		+
指導・学習	0.01465	0.424886		

活、指導・生活、指導・友人、第2因子に受容・学習、受容・友人が寄与していることがわかった。そこで、第1因子を生活の因子、第2因子を受容の因子と命名した。

グループホーム制の生活では、日常生活そのものに重点がおかれており、小グループの中で、対他者よりもプライベートな生活について承認、指導を求めているといえよう。次に重点がおかれているのが承認であり、とりわけ、学習および友人について承認を求めている姿がうかがえる。

大舎制群およびグループホーム制群の因子構造は比較的似通った傾向を示しており、第1因子に生活の因子が抽出され、生活上でのしつけ、承認がまず重要な要素として表現されている。混合制群は因子構造にやや違いがあり、承認を得ることを主体としている。生活場面の变化は、各生活の場においていかに承認を得られるかが問題となり、いわば承認の得られ方によってその後の生活が決定されるといえる。また、低学年については発達の成熟度が低く、自主性を重んじるよりは、生活上での承認を求める傾向がある。

②高学年の結果

混合制群(表10)では、第1因子に指導・友人、指導・学習、指導・性格、指導・生活、第2因子に指導・生活、民主・学習、民主・生活、受容・学習、受容・性格が寄与していることがわかった。そこで、第1因子を指導性の因子、第2因子を学習の因子と命名した。

混合制の生活では、まず指導性に重点がおかれ、各領域すべてにおいて指導性をもとめている姿が見受けられる。しかし、いずれも望ましい状況ではない。次に学習について重点がおかれるが、自主性の尊重および承認に子どもの注意は集中するが、いずれも点数は低い。

大舎制群(表11)では、第1因子に指導・性格、指導・友人、指導・学習、指導・学習、受容・性格、受容・友人、第2因子に民主・生活、民主・性格、民主・学習、民主・友人、が寄与していることがわかった。そこで、第1因子を受容・指導性の因子、第2因子を民主性の因子と命名した。

大舎制の生活では、指導および承認について子どもの関心は集中しており、また自主性の尊重についても子ども達の関心は集まっている。しかし、平均点からみると、いずれも肯定的とはいえず、唯一普通域にある民主・生活については、大舎制群では寄与項目として抽出されていない。

グループホーム制群(表12)では、第1因子に指導・性格、指導・友人、指導・学習、指導・生活、受容・学

表 10 PCRT 因子負荷量 混合制 高学年

変数名	第1因子	第2因子		
指導・友人	0.907963	0.042113		
指導・学習	0.811635	0.044354		
指導・性格	0.781044	0.256111		
指導・生活	0.580355	0.5605	+	+
民主・学習	-0.27421	-0.76522		
民主・生活	-0.26432	-0.62242		
受容・学習	0.317997	0.555125		+
受容・性格	-0.19581	0.519641		+
受容・生活	0.034119	0.282441		
民主・友人	-0.40627	-0.37782		
民主・性格	-0.37866	-0.44536		
受容・友人	-0.43352	-0.13571		

表 11 PCRT 因子負荷量 大舎制 高学年

変数名	第1因子	第2因子		
指導・性格	0.818081	-0.22409		
指導・友人	0.739033	-0.34173		
受容・学習	0.711092	0.245429		
指導・学習	0.697705	-0.21796		
受容・性格	0.558917	0.373257	+	
受容・友人	0.520622	0.217338	+	
民主・生活	0.077528	0.67192		
民主・性格	0.044959	0.651485		
民主・学習	-0.00817	0.582957	+	
民主・友人	-0.0364	0.530151	+	
受容・生活	0.300562	0.277643		
指導・生活	0.338936	-0.40943		

表 12 PCRT 因子負荷量 GH 制 高学年

変数名	第1因子	第2因子		
指導・性格	0.842954	0.338781		
指導・友人	0.828242	0.019395		
指導・学習	0.825698	0.150192		
指導・生活	0.722527	-0.11649		
受容・学習	0.614923	0.523309		+
受容・友人	0.540035	0.48513	+	
民主・学習	-0.0869	0.738459		
受容・生活	0.29989	0.646689		
民主・性格	0.203706	0.637608		
受容・性格	0.479501	0.576308		+
民主・友人	0.134588	0.517947		+
民主・生活	-0.03856	0.288216		

習、受容・友人、第2因子に民主・学習、受容・生活、民主・性格、受容・性格、民主・友人、受容・学習が寄与していることがわかった。そこで、第1因子を指導性の因子、第2因子を受容・民主性の因子と命名した。

グループホーム制での生活では、指導性に重点がおかれ、さらに指導とともに承認に注意が向いているが、いずれも点数は低い。

高学年群では、いずれの養育形態においても、第1因子に指導性が抽出されている。全体として、教育的配慮等にその中心がおかれているように感じているものが多い。ただし、平均点からみると、いずれも放任的な方向に向いている。

第2因子に抽出されている因子はそれぞれに特徴的であった。すなわち混合制群では学習、大舎制群では民主性、グループホーム制群では受容・民主性である。グル

ープホーム制群と大舎制群とは似通った因子構造を有している。混合性群については、大舎制群とは違った構造をもっており、大舎制群が自主性の尊重および承認に子どもの注意が向いているのに対し、混合制群では学習についての自主性の尊重および承認に重点がおかれている。ただし、受容性が子どもへの承認に関するものであり、民主性が子どもの自主性に関わるものであることを考えれば、大舎制群、グループホーム制群ともに、自主的な行動に関連する関わり方をおこなっているともいえる。

それに比べて、混合制群では、第2因子に学習の因子があげられており、受容性および民主性とは異なり、情緒レベルではなく、知的な部分での関わりが中心になっている可能性がある。すなわち、子どもの自主性に焦点をあてるのではなく、学習あるいは教育といった知的側面に焦点があてられているということである。

③中学生の結果

混合制群(表13)では、第1因子に指導・学習、指導・性格、受容・学習、指導・友人、指導・生活、第2因子に民主・性格、民主・学習、民主・友人、受容・友人、民主・生活、受容・生活、受容・性格が寄与していることがわかった。そこで、第1因子を指導性の因子、第2因子を民主性の因子と命名した。

混合制の生活では、指導性へ子どもの注意がむき、さらに自主性の尊重へと注意がむけられていることがうかがえる。

大舎制群(表14)では、第1因子に民主・性格、民主・生活、受容・生活、民主・学習、民主・友人、受容・性格、第2因子に指導・性格、指導・学習、指導・友人、受容・学習、指導・生活が寄与していることがわかった。そこで、第1因子を民主性の因子、第2因子を指導性の因子と命名した。

大舎制の生活では、まず、自主性の尊重に子どもの注意は向けられ、次に指導を求める姿がみられる。しかしながら、いずれも点数は低く、必ずしも肯定的であるとはいえない。

グループホーム制群(表15)では、第1因子に民主・生活、民主・性格、受容・生活、民主・友人、指導・生活、民主・学習、受容・友人、第2因子に指導・学習、受容・学習、指導・性格、指導・友人が寄与していることがわかった。そこで、第1因子を民主性の因子、第2因子を指導性の因子と命名した。

グループホームでの生活は、大舎制と同じく、自主性の尊重が中心になり、次に指導性を求める姿がうかがえる。しかし、これもまた平均点はいずれも低く、生活に

表 13 PCRT 因子負荷量 混合制 中学

変数名	第1因子	第2因子		
指導・学習	0.823526	0.082265	+++	
指導・性格	0.790679	0.062879	++	
受容・学習	0.769991	0.335447	++	
指導・友人	0.742577	0.043113	++	
指導・生活	0.634195	-0.27235	++	
民主・性格	0.003537	0.849671		+++
民主・学習	-0.07956	0.728133		++
民主・友人	0.103677	0.698023		+
受容・友人	0.439925	0.686323		++
民主・生活	-0.30431	0.662013		++
受容・生活	0.406883	0.600485		++
受容・性格	0.413898	0.518949		+

表 14 PCRT 因子負荷量 大舎制 中学

変数名	第1因子	第2因子		
民主・性格	0.720357	-0.08151	+++	
民主・生活	0.716395	-0.1948	+++	
受容・生活	0.706469	0.190984	+++	
民主・学習	0.689141	-0.18672	++	
民主・友人	0.635458	0.082636	++	
受容・性格	0.587887	0.208944	+	
指導・性格	-0.0598	0.782809		+++
指導・学習	0.14538	0.775008		+++
指導・友人	0.004485	0.734774		+++
受容・学習	0.332889	0.650172		++
指導・生活	-0.44821	0.611897		++
受容・友人	0.494038	0.240649		

表 15 PCRT 因子負荷量 GH 制 中学

変数名	第1因子	第2因子		
民主・生活	-0.72239	-0.06462	+++	
民主・性格	-0.69254	-0.10688	++	
受容・生活	-0.65402	0.375732	++	
民主・友人	-0.65185	-0.10013	++	
指導・生活	0.621037	0.210015	++	
民主・学習	-0.59844	0.083638	+	
受容・友人	-0.55792	0.068598	+	
指導・学習	-0.06669	0.799786		+++
受容・学習	-0.07915	0.745081		+++
指導・性格	-0.01662	0.711342		+++
指導・友人	0.294757	0.689205		++
受容・性格	-0.47415	0.314063		

についての自主性の尊重が普通域に達しているのみである。

中学生の結果においても、やはり大舎制群とグループホーム制群の因子構造はほぼ同じで、混合制群の因子構造のみがやや異なっている。大舎制群およびグループホーム制群では、ともに民主性の因子が抽出されており、集団生活の中で自主的な関わり方を求められていることがうかがえる。一方、混合制群では、指導性の因子が第1因子に抽出されており、子どもは教育的なしつけを中心とした関わり方を感じていることがうかがえる。これらの状況は高学年群でもみられているように、混合制群の子どもが大人に対して、指導をされる感覚をもっていることがわかる。

3. 総合的考察

PCRTの結果からは、全体的に点数が低いことが第1の特徴としてあげられる。一般の得点と比べてみると、かなりの部分で否定的感情を子どもが抱いていることがうかがえる。低学年の間は生活形態に関わりなく普通あるいはそれ以上の得点をつけているが、高学年、中学生になってくるとほとんどが否定的になっている。当初、仮定していた、少人数制のホームで生活する方が子どもの対人関係においても、よい影響をあたえるといったことも、現時点では必ずしも検証できなかった。

因子分析の結果からも明らかなように、大舎制での生活と、グループホーム制での生活の間で、保母に対する考え方にはそれほど差は認められない。ただし、混合制での生活のみは、やや違った形で保母との関係を結んでいる。

いずれの年齢においても、友人についての承認が得られていないことが明かである。保母は、子どもの友人関係については、かなり注意を払っていると考えられる。

また、子どもは、承認されていない感覚を常に抱いているということになる。

高学年以上になると、生活において自主性が重んじられ、こと細かく注意されることは少なくなる。しかし、指導性の点数の低さは逆に放任的になってしまっている傾向もみられ、自主性を重んじるといったかたちでの肯定的なものといえない可能性がある。以上、全体をながめてみると大舎制のように大人数であっても、子ども達に悪影響を及ぼすとは必ずしもいえない。

また、逆に少人数制であるから良いともいえず、結局、混合制のように生活形態の変化が多数ある場合に、パーソナリティに他のグループと違った特有のパターンを有するようになるのは確かなようである。

【参考文献】

1. 藤原喜悦・下山剛・福島脩美著『親子関係調査票解説（低学年・高学年・中学生）』金子書房、1983
2. 全国社会福祉協議会・養護施設協議会編『養護施設ハンドブック』全国社会福祉協議会、1981

Summary

This study deals with difference in development of children who live in different type children's homes, mass boarding, group home or mixed boarding living type. Collected samples in PCRT(Parent-Child Relationship Test) were 418.

The findings are followings;

1. In all grades, the average score is not high and it marks "hard" or "very hard".
2. In the lower grades, males in mass boarding don't think that they are approved.
3. Females of the higher grades feel that they receive negative concerning by their friends.
4. Males in mixed boarding and in mass boarding have negative sensations about the care by residential staffs.
5. Females in group home feel that they receive negative concerning by friends but think that their independence is respected.

The developmental characteristics by factor analysis, are followings;

1. In the lower grades, the first factor is the life condition in mass boarding and group home and the second factor is the acceptance in group home and learning condition in mass boarding.
2. In the higher grades, the first factor is the care in all type and the second factor is the approval in group home, the intellectual condition in mixed boarding, and the respect of independence in mass boarding.
3. In junior high school students, affecting factors are the approval in mass boarding and group home, and the educational discipline in mixed boarding.